

ゴイシジミは一度目にしたなら、なるほどとその和名命名が納得できる特異な碁石様斑紋をもつかわいいシジミチョウだが、このチョウに会いたいからあそこに行こう、と簡単にいえるチョウではない。筆者自身、初めてゴイシジミを見たのがどこで、いつのことだったか明確には思い出せない、そういう地味なチョウで、予期しないところで不意に出会ってしまう、そういうチョウだ。



チョウの幼虫はほとんど例外なく植物の葉や花を食べて育つが、ゴイシジミは例外の筆頭であって、幼虫がなんと純肉食性なのだ。といえは一体何を食うのか、と首をかしげることになるのだが、タケやササ類に寄生するタケノアブラムシを食べることが分かっている。そのせいで、ゴイシジミ

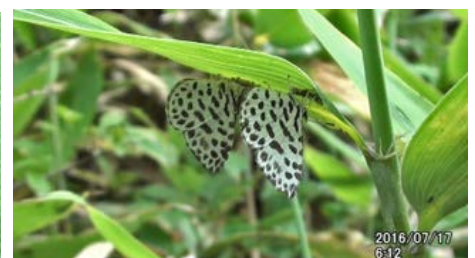
に出会える場所にはたいがいタケやササが繁っており、それにはタケアブラムシが寄生しているということになる。

2004年の8月、開田高原のとある林道へと踏み込んで、両脇にクマザサが繁る環境になると、とたんに複数頭のゴイシジミが黒と白とを交互にちらつかせる、いわゆるフラッシュ飛翔を展開してくれた。純白に碁石模様が目立つ裏面とちがって翅表は短調な淡黒色だが、飛んでいるときには光線の反射具合で薄ムラサキ色を帯びてみえることもある。また、♀では前翅に白い斑点模様があって、これがなかなか美しい。開田高原林道では、クマザサ葉上でまさに♀がV字開翅状態をとる場面をカメラに納めることができています。



ゴイシジミ以外に幼虫が純肉食性であるものとして、ゴマシジミとオオゴマシジミというシジミチョウがクシケアリの卵や幼虫を食べて育つことが知られている。一方、純肉食性ではなくて通常は植物の葉を食べるのだが、場合によっては幼虫同士で共食いをするというケースが、例えばギフチョウ、ジャコウアゲハ、クモマツマキチョウなどで観察されている。後者の場合は、自然界に食エサとしての植物が少ないために、同種間で生き抜かねばならない生存競争そのものであって、あの可憐で美しいクモマツマキチョウが幼虫時代にそのような獐猛な食性で生き抜いた姿であるとは考えたくないけれども、現実はそのように厳しいものだ。八重山諸島でもヤエヤマムラサキの幼虫で共食いが観察されているが、この場合も母蝶が一度に300-500もの産卵をして幼虫がほとんど終令期まで群生することから、ときにはけっこう大きなオオイワガネの木であっても葉っぱがほぼ丸裸状態となることがザラであって、共食いによって種を保とうとする本能が働くのであろう。

2016年7月17日：群馬県湯の丸高原。朝6時前、雨が降る気配がないので山道を登ってみる



と、路傍に多い笹竹周りにゴイシジミの姿を多く見る。わずかに翅表がのぞける個体は前翅白斑の面積が広いメス個体だが、その全部を見せてはくれない。ゴイシジミが多い理由は、辺りの笹竹にアリマキの類が群生していることで納得。